



感染症対策もあり疲れもありますが、子どもたちのキラキラした瞳を見ると、力も湧いてくる感じです。

定期大会の返信葉書に添えられた仲間からのメッセージです。

県内における感染拡大も続く中、子どもたちが安心して、笑顔で学校生活を送ることができるよう、また、養護教諭自身の健康と生活を守るために私たちは何をどうすべきか…。2021年度も一緒に考え、運動につなげていきましょう。

第46回埼玉教組養護教員部定期大会を開催しました

「ヘルプを求める力をつけたい」

6月26日、第46回の養護教員部定期大会を開催し、議案書の総括と今年度の活動方針が決定しました。部長からは、「長引くコロナ禍で、保健室利用が増えている。我慢を強いていることが多く、ストレスを抱えている。子どもたちには、ヘルプを発信する力をつけたい」と挨拶がありました。以下、討論の様子です。

タブレットについて

(桶川) クロームブックの配布があり、授業で使用している。準備や片付けに時間がかかり、授業時間で収まらない。1学年同時使用で通信障害が起こるトラブルが発生している。休み時間などの管理も問題になっている。職員会議もクロームブックで行われ、画面だと頭に残りにくく問題だと感じている。

(入間) 一斉休校があつたが、そのことで、タブレット配布が加速した。一斉休校の検証もされていないことを問題にしている研究者がいる。タブレットは使いにくく、すべて学校に丸投げで、学校では混乱している。子どもたちの健康配慮がない。

(富士見) ある学校では教務がタブレットの仕事を担っているが、煩雑で不具合も起きているため、負担が増えた。タブレットを持ち帰った際、子ども同士がチャットでつながるなど、使用について問題があがってきている。子どもたちの健康も心配。

(行田) 加須では、週案のタブレット作成が強制的に行われている。行田では、タブレットの使用状況の調査が入っている。教員の評価につながらないか心配している。過重労働になっている。小学生も外遊びをしなくなり、タブレットの弊害が出ている。

妊娠時の加配について

(西部) 6月から産休に入る人だったが、昨年度から校長が動き、4月1日から7日まで市費で加配措置があった。4月8日からは県費で配置され、養護教諭の妊娠時の加配が定着してきている。複数になり助かったと言われた。繁忙期だけでなくいつでもとれるように広げたい。

小学校にも相談室・相談員配置を

(西部) 小学生でもリストカットの事例が増えている感じがする。コロナ禍の中で、登校できない生徒も増え、登校できない理由もはっきりしないことが多くなっている。小学校でも心のケアが必要なので、相談員の配置をしてもらいたい。

(西部) 小学校では相談員がいないので、登校できない児童を保健室で受け入れることが多い。保健室は、健康診断や他の子どもたちも来るので、居場所がない状態。発達障害などで、薬を服用していたり、教室で集中できなかつたりすることがあるので、常時人がいて子どもを受け止めてもらえる場が必要。

(北) 人の配置があっても場所が確保できないところがあった。生徒は、リストカットをネットで検索している。不登校の生徒が増え、相談室利用にきまりがあり、学習支援室で学習をしているが、いつも教員がついているわけではない。

定数増のとりくみ

(さいたま市) 来室が多く、1日30人ぐらいの時もあるが、教員も多忙なため、手伝ってもらえない。リストカットなどゆっくり話を聞きたいが、多忙すぎて聞けないことがある。「ヘルプを求める力が大事」と話があったが、話をしたい生徒がたくさんいて、来室する生徒を全て受け止める自信がない。SOSを発信できたらと思う。

(西部) 1学年2クラスの小規模校で、教員の持ち時間が異常に多い。1人が病休に入ってしまった。教員の定数も増やしてもらいたい。

(部長) 養護教諭1人配置では、保健室でいてねいに関わり、先生たちとも十分連携をとれる生徒数は250人ぐらいだと実感している。複数配置拡大の要求をしていきたい。

2021年度養護教諭部新役員です。よろしくお願いします。

県内各地に組合員がいることが全ての養護教諭にとって支えとなります。
小さなことでも連絡を取りながらみんなで考え、一緒にとりくんでいきましょう。

テーマ「みんなで語り合おう～コロナ禍で養護教諭の仕事」

学習会にはオンラインで6名、埼教組会議室から6名の参加がありました。

最初に本部の金井書記長から、学校でのプール指導やオリンピックの学校連携観戦プログラムについて、県教委に申し入れたことなどを報告していただきました。

その後、テーマに沿った話し合いをしていきました。

昨年度の学校再開にあたって

小学校からは、新型コロナウイルスに関する全体への保健指導と、その後手洗いの大切さを伝えるために、実践を取り入れた学級での保健指導について報告されました。養護教諭が資料を準備し、発達段階に沿った保健指導を展開しました。

中学校からは、コロナ禍での定期健康診断時に、学校医や検査機関からの指示に翻弄され、使用する器具や会場づくり、生徒への指導など細かな対応について報告がありました。

また、生徒に対し新型コロナウイルスを学習するために、感染症の歴史や社会的にみたコロナウイルス等を取り入れ作成した資料の紹介がありました。



学校再開後の子どもたちの様子

小学校では、昨年度学校再開後の 1 学期に体調不良者の来室が多くみられました。中でも 2 年生の生活アンケートの結果では、排便や朝ごはん等の生活リズムが大きく崩れていました。小学 1 年生の最後の 1 か月は他の学年よりも心身が大きく成長する大切な時期であり、それが休校により抜け落ちたことで、学校の存在は単なる学習の場ではないこと、子どもたちが健やかに成長するのに大切な場所であることを再確認したとの報告でした。

現在の課題・学校の様子

小学校からは、職を失った保護者の不安が、そのまま子どもの心身の不安定さにつながっている様子や、自己肯定感が低くなっている児童、タブレットの配布により、YouTube 等の動画を長時間視聴している児童が増えている実態が報告されました。生活リズムの崩れや問題行動の低年齢化が心配されます。中にはリストカットに興味を示す児童、集団が苦手で過緊張による体調不良の児童も多くみられるという報告もありました。

また、配慮を要する低学年の児童へのマスク着用の指導の困難さが報告され、その対応の難しさ、取り組んでいることなど校種を越えた交流ができました。



中学校からは心の面での不安による体調不良の保健室来室増加、相談室に駆け込む生徒、不登校傾向の生徒が増えている実態もあげられました。特に腹痛症状の訴えが多くあげられました。

また、緊急対応のみならず、集団不適應の生徒の体調不良等の生徒の対応に追われ、今まで以上に大変な引率だったコロナ禍での修学旅行の様子や、2 学期以降の合唱コンクールや宿泊行事に向けて、どのようにコロナ対策をしていけばいいのかという意見交換がされました。

高校からは、授業を行う教師のフェイスシールドや部活で使用する器具の消毒などの対応について報告がされ、改善点などないか協議を深めることができました。

出席停止の扱いについては、「体調不良時には無理して登校しない」が前提にあることで、登校することに強いプレッシャーにならずに済んでいる生徒の様子も報告されました。

現在も変異株による感染状況の悪化が見られる上に、ワクチン接種や感染者への人権問題等、今まで経験したことのない問題が出てくることが予想されます。

本来、群れて育つ子どもたちの学びの場である学校で、健やかに成長するためには何が必要なのか。養護教員部では、今後も学校や地域の情報を共有し、子どもたちの成長につながる保健室づくりを目指して学んでいきたいと思います。

